

# Cover Presentation

表紙プレ  
ゼンテー  
ション

## 本多の森に息づく無垢の「エアポケット」

松本大  
Text by MATSUMOTO Dai  
建築家  
都市環境マネジメント研究所 研究員  
松本大建築設計事務所 代表



金沢市中心部の「本多の森」は、石川県立美術館、県立歴史博物館が建つ高台だけでなく、崖下の中村記念美術館、松風閣庭園までも含む広大なグリーンゾーンだ。百万石通り、本多通り、大乘寺坂から本多通りに至る小路に囲まれたそのエリアは、隣接する兼六園の広さにほぼ匹敵する。藩政時代、加賀八家・

本多家の上・中屋敷が建ち並んでいた「本多の森」は、明治維新後、公共ゾーンに生まれ変わり、瑞々しい自然が荒らされることなく今に受け継がれてきた。

「本多の森」を一巡してみた。このゾーンを横切る道は、本多公園から県立美術館への「美術の小径」しかない。ゾーンの中心部は都心でありながら、小立野台地に接する崖地であり、長らく、容易に人が近づけない場所であり続けてきた。緑が濃いその一帯には常緑広葉樹の巨木が数多くそびえる。常緑広葉樹の森は、日本古

来の「鎮守の森」の生態を象徴する貴重な自然遺産である。人の手によって造られたものではなく、手つかずの自然が息づいている。そこに立つと、荒々しい原始的感覚、むせるような生命感を感じる。



芥川賞作家の日野啓三は、小説「夢の島」（一九八五年）で東京のお台場に存在する、周囲から隔絶された荒々しい自然の中のドラマを、乾いた都市との対比の中で描いた。「本多の森」中心部に残る無垢の自然空間も、都市（＝調整された自然）の中で、一瞬、本来の自然の荒々しい姿を垣間見せてくれる。昼下がり、「美術の小径」の中心に立ち、木々を見上げてほしい。日常からエアポケットに入ったような感覚は、忘れかけたものを思い出させてくれるかもしれない。